

美術

▲繪畫と趣味
▲實用的の繪畫
▲専門の美術家と天賦の才
▲眞面目なる勉強
▲サロンと製作品
▲現在の日本美術界

黒田清輝君

私が今述べやうと思ふ所の繪畫に就ての話は、主に未だ意思の確然と定まらぬ云はゞ普通學時代の人々に對し、凡そ繪畫なるものは斯う云ふものである、學ぶには斯うだと云ふ事を極ザツと話して見るのである。

さて、畫と簡單に云へば、先づ紙や布の上に物の形を描き顯はしたものと云ふ迄の事であるが、これが實用上にも大變必要な場合がある。ところが、誰しも畫と云へば實用の事を考へず、直に趣味と云ふ方ばかり考へを向ける。

成程、畫と云つて趣味を考へるのは尤もの事である。若し畫にして苟も趣味がないならば、本當の美術的眼識を以て解釋する所謂畫と云ふものでないことは申す迄もない。去り乍ら、この美術的の解釋を下して行く側の畫は、誰でもやらうと思つて出來ると云ふ譯でなく、又誰でも遣つて見るべきものでもなからう。これに反して、實用の方の畫は誰にでも必要で、又必要な丈、誰でも遣らねばならぬものと思はれる。

これから推して來ると、孰れの國でも普通教育の中に圖畫科の設けのあるのは、勿論美術家をこしらへる目的ではないが、畫と云ふものに必要な點があるからであると云ふ事が解るであらう。今その必要な點を一々こゝで事新しく云ふには及ばぬから、其れは止めるとして只青年方に一言するのは、畫は必ず本氣になつて、或る程度迄遣り玉へ。併し美術家になれとは決して勧めぬと云ふ事である。それで、諸君は前以て此邊に能く區別を立て、美

術家になりもせぬ人が、その眞似をして見るやうな愚を學ばぬやう。さうかと云つて、美術家になるのではないとて、書を全く無用視するやうな事はないやうに望むのである。

されば、どこまでも眞面目に書を稽古するが善い。その稽古は如何にすれば善いか。それは、實用に適するを目的とし、物の形を正確に寫し得るを以て主旨とする。これさへ充分なら、趣味のある書の眞似や、美術家氣取のことは全く遣るに及ばぬ。何故とならば、眞正の美術は眞似や、氣取りで出来るものでない。それには、矢張正當の順序を踏んで稽古をなし、正當に費やすべき時間を費やし、苦しみもし、而も天賦の才ある人にして、初めて成功するのであるから、これを狙ふのは全く専門家の事で、専門家ならぬ人の徒らに遣る事でない。又遣つたとて畢竟は徒勞に歸するのである。

○

右の如く云へば、或人は反問するであらう。青年時代には趣味と云ふものは全然取除けよとの意味であるかと。私の考へはさうではない。私の意見のあるところを今少しく委しく申せば斯うである。曰く、青年時代でも趣味は幾何でも持つが善い。又是非持つて貰ひたい。併し一體これのあるなしは天然に屬する事が多いのであつて、其天賦の趣味は勉強と云ふ人力で引き出すのである。即ち畫の上に現はれる趣味は自然に生ずるのであつて、つまり眞面目な修業の結果に外ならぬのであるから、趣味があると云ふ風を見せたがる傾向のある事丈は避けたい。何故ならば、これは害徒らに多くして、其實がないからである。

さらば、其害は何處にありやと云ふに、第一に高慢心を高めて、精神を墮落せしめ、そして小成に安ずる所でない

く、却て小成にさへ行きかねる事が到来する。故に、本當に畫は嗜好を持つて居る人であるならば、其人は傍目も振らず、専門家になる準備をするが善い。併し普通學時代には、畫を全く實用向きに描くと云ふ方針でやるが利益である。

實用向きに描く畫とは何であるかと云へば、それは物の形を正確に見て、寫す事を學ぶので、専門家の畫を眞似て達者振る必要は更でない。併し乍ら、物の形を正確に見て、これを上手に寫し得る事になれば、自然にまた其内に趣味も加つて來るものである。それで、若し美術の趣味にして斯う云ふ處から自然に生じて來たものとなれば、其趣味には眞に貴い價值があるが、輕薄な考へから美術家を氣取り、美術家の眞似をすると云ふ事になると、單に其人が墮落するのみならず、其畫は美術はおろか、實用にだも漸々遠つて、終にどちらにも付かずの不具なものになり果てるであらう。これを例を以て申さば、先づ近頃流行の繪葉書の上に描かれたあるへ、とのやうな人物——ともつかぬ、何とも云はれぬ形のものを描く事は出來ても、コーヒ茶碗一つ註文するのに、其雛形を正確に描き顯はして、示すと云ふ事も出來ない。斯うなつて來ると、慙ひに高尚らしい眞似をする事が、一文の價值もないことに思ひ到らぬ譯には行くまい。

それで、總て物事に就ての高尚なと云ふ事や、趣味のあると云ふやうな事は、決してノラクラより生ずるものではない。面白半分にした仕事に依つて好結果を得やうなど、云ふことは、繪ばかりに限らず、何事の上にも六ヶ敷い相談であると思ふ。ある時、佛蘭西で、丁度サロンの時節の事で、友人同窓のものなどが皆な各自の製作を出品したがつて、教師の意見を尋ねると、『どうも皆なサロンに出すことをばかり希望して困る。畫が善く出來てサ

ロンに出すことなら、それは至當の事であるが、未熟な畫をも無理に出したいと云ふ希望を抱くのは甚だわからぬ。それは丁度自分に人に見えない疵を持つて居て、私に斯う云ふ疵があるから見て下さいと云ふやうなもので、疵さへ隠して置けば人に知られずに済んだものを、わざ／＼自分の片輪者であることを發表したがると云ふ事があるものか。』と、叱られた。

つまり、云はゞ急ぐ振るなと云ふ意味である。

それで、返へす／＼も注意して置きたいのは、餘り軽々しく畫家らしい眞似をせぬやうに祈るのである。

因て、將來大に此道で爲すあらうと云ふ人々に於ては、普通學を了へた後に、本式に充分に修業をするが善い。今日の日本の有様では、實のところ、一般の美術界が非常に卑いのであるから、今の青年の中から將來立派な専門家になる人が澤山出て呉れなければならぬ時節である。されば、今後本當に繪畫で身を立てやうと云ふ人は、一時流行の繪葉書や、雑誌の口繪位に満足せず、急かす振らず、眞面目な稽古を爲ねばならぬ。即ち、繪を以て楽しみとせず、却て苦しみとする程の覺悟が欲しい。

〔「中学世界」九八 明治三九年六月〕